

第25代専如（せんによ）門主
伝灯奉告法要 カナダ開教区合同参拝ツアー

2016年10月10日～23日

参加費：\$6,000（定員：30～35名）

ツアー引率：生田グラント先生

- 10月10日（月）
カナダ発
- 10月11日（火）
成田空港着→東京泊
- 10月12日（水）
築地本願寺参拝・東京観光
- 10月13日（木）
東京観光
- 10月14日（金）
稲田・西念寺参拝・日光観光
- 10月15日（土）
長野へ移動・善光寺参拝・湯田中温泉泊
- 10月16日（日）
国府別院参拝・黒部ダム・新潟泊
- 10月17日（月）
金沢へ移動・兼六園観光等・金沢泊
- 10月18日（火）
福井へ移動・永平寺（禅体験）加賀温泉泊
- 10月19日（水）
京都へ移動・京都観光
- 10月20日（木）
親鸞聖人所縁の地観光
- 10月21日（金）
専如門主様伝灯奉告（継承）法要参拝
- 10月22日（土）
京都（各自自由）
- 10月23日（日） 関西空港からカナダへ帰国



※ツアー詳細はカナダ各仏教会にて配布中です。
参加登録は <http://canada.kiecan.com/jsbtc2016>

近畿日本ツーリスト： 1-800-463-7723

ツアーに関する質問は生田先生(604) 908-4140

春季彼岸会

3月20日(日)

午前11時より

我々の世界を川のこちら側の岸(此岸) 仏の世界を向こう岸(彼岸)に譬え、西方極楽浄土に生まれる事を願い春と秋の二度、真西に沈みゆく太陽に手を合わせ礼拝したのが、お彼岸の起源といわれています。



お彼岸のご縁にぜひお参り下さい

敬老会

3月20日(日)

喜寿、米寿、白寿を迎えられる方々に、長年にわたりお寺に貢献していただいた事への感謝の気持ちを込めて、表彰状を送らせていただきます。

該当されます方は、出来る限り早くお寺までお知らせ下さい。

なお数え年・満年齢

の

どちらでも結構です



舞踊会グループ フアンドレイジング

お弁当セール

4月3日(日)

午前の英語祥月法要後すぐ

お寺の舞踊会グループが
美味しいお弁当を販売します
なお売上金はすべて
舞踊会グループの活動
資金として使用されます

無碍光仏のひかりには
清浄歓喜智慧光
その徳不可思議にして
十方諸有を利益せり・

実は高橋夫人のご両親の児玉末吉氏とマサ夫人は、思慮深くとても寛容で素晴らしい喚鐘の恩人だったのです。高橋夫人は渋々その鐘の歴史について教えてくれました。というのも、両親は生前、寄付のことを口外するなと口を酸っぱくして言い聞かせていたのです。寄付は個人的な名譽の為ではなく、純粋に仏法を広める為に行いたかったのです。



喚鐘の恩人、児玉夫妻

児玉末吉氏がわざわざ日本で作られた鐘をカナダまで運んできた理由は、「おいでおいで。仏法を皆で聞きましょうよ」ということらしいのです。末吉氏が子供たちによく言っていた言葉を、高橋夫人は今でも鮮明に記憶しています。「おいでおいで。仏法を皆で聞きましょうよ。」「皆さん。来て仏法を聞きましょう。すると感謝の気持ち湧きあがってきますよ。」「喚鐘の音が仏法の教えに耳を傾ける人を呼び続けるのに最適な方法だと、彼は純粋に信じていました。」

後のツジ・ケンリュウ先生は喚鐘の製造と購入を進める児玉夫妻を助けることに尽力いたしました。先生は夫妻に姓を刻み込むことを強く勧めます。この行為はあくまで鐘を識別。

するために行う慣習なのだと言われました。最終的には児玉夫妻が折れて、先生の案に渋々合意しました。「児玉」という字はこの鐘に今でも残されています。

1957年夏、遂に喚鐘が日本からトロントに到着します。それはとても大きく重いものでした。高橋夫人はその鐘が家に届いた時の興奮を笑いながら話してくれました。その光景を皆さんは想像できるのでしょうか？夫人の兄弟にレッカー車を持っている者がおり、それを使い918 Bathurst Streetに在った旧トロント本願寺に運ばれました。その後お寺の移転と共に今の場所に安置されているのです。

次にお寺を訪れこの鐘の「ゴーン…ゴーン…ゴーン…」という音を聞く際には、その深みのある美しい奏でに耳を澄ませてみてはいかがでしょうか。そして児玉氏の「おいでおいで。仏法を皆で聞きましょうよ。」という心からの願いを感謝の気持ちで思い出してみませんか。

合掌

ワカサキ・ライリー、

高橋メイ夫人、そして私たちの喚鐘



されます。頭では分かっている、受け入れることが出来ないことはしばしば起こってしまいます。それが痛みを生んでしまうのです。

はどのような状態から心の底から納得できる形で受け入れられるようになるのでしょうか。信仰がその答えを示してくれます。私は阿弥陀仏の御慈悲を現実のものとして信じています。私は御仏の教えを信じなくてはなりません。その完全なる信仰が所謂「真心（しんしん）」なのです。

キリスト教に起源を持つ素晴らしい祈りの言葉があります。私はその言葉を少し置き換えて皆様に紹介します。仏教徒として、私たちは信仰心を競ったりすることはありません。しかし、もしあなたが今、現実をどのように受け入れたらよいのか分からず苦しんでいるのであれば、この話は一助となるかもしれません。

阿弥陀仏の御慈悲と共に、私の導きとして

平静が見つかりますように

私には変えられないことを受け入れるために。

私に変えられることを変える勇気が見つかりますように

そして変えられるものと変えられないものの違いを知る知恵が授けられますように。

ですから、人生という大きなカードゲームにおいて、あなたに配られた悪い手を変ええる手段があるのであれば、変えなさい。しかし、もし何も変えられないのであれば、受け入れる手を見つける必要があります。変えられないものを変えられると思ってしまう妄想こそが苦しみの原因なのです。

釈尊の御教えは今回紹介した第一の真理で終わりませんでした。そのことでただだけの信徒が感謝してきたでしょうか。話は次回へと続きます。



トロント本願寺の喚鐘：背景と由来

ゴーン： ゴーン： ゴーン：

法話の始まりを告げ、住職、門徒、訪問者を本堂に呼ぶ時に鳴らす、わが寺の喚鐘の音です。

この鐘は本堂の北西角に置かれています。皆様はこの大きく美しい鐘が一体どこからやってきたのか疑問を持たれたことはありませんか？購入されたのでしょうか？もしそうならいくらだったのでしょうか？いっどこから取り寄せたのでしょうか？ホームデポ、ウォルマートや他の身近なお店で売られているような代物ではありません。

法話の一部のこの何気ない、「ゴーン」という喚鐘の響きを個人的に有難いと感じるようになってきました。私にとつて、この鐘の音が気持ち切り替え、緊張を解し、まさに始まりとする法話に集中する態勢が出来上がります。何度も何度もこの鐘の音を聞き続けるうちにこの鐘について興味を持ち始め、昨年、私よりも先輩の方々にこの鐘について質問をしてみました。ほとんどの方々はあまり詳しいことは覚えていらつしやりました。メイ・アキエ・高橋夫人はこの鐘のことなら何でもご存じだったのでした。

受け入れること

仏教に出会った者の多くが一度は第一の真理を耳にしたり目にしたことがあるでしょう。しかしこの真理を本当に受け入れたことはあるのでしょうか。私は自分がそうではなかったことを自覚しています。頭では理解できていてもどこか受け入れ難いものがありました。解釈を誤り恐れる人もいれば、若きシツダールタ王子（釈尊）の父が愛によってこの真理を覆い隠そうとしたように、この真理を覆い隠してしまおうとする人もいますでしょう。真理の拒絶は確実に不安をより一層大きくし、幸せで満たされた人生の前に立ちほだかつてしまうということに、シツダールタ王子が気付いたように、私はある時気が付きました。

私にとって、真理を受け入れたことは精神の成長の為の大事な最初の一步となりました。そしてその一步に続く三つの教えがありました。感謝、瞑想、そして思いやり。これらの三つの教えは今後別の記事で紹介しようと思います。

私は単純な現実が気が付く必要がありました。紹介した歌にあるように、バラ色の人生が約束されるようなことはありえず、「太陽の輝きに寄り添い、時々雨に出くわす。」

その雨を受け入れることによって初めて私たちは充足した人間、生を受けたことに対する感謝に満たされた存在、として成長できるのです。

物事は私たちが望むようにはなりません。若い時には年をとりたいと思ひ、年を取ると若返りたいと願います。金髪の人や赤毛に憧れ、赤毛の人は黒髪になりたがる。高給取りになりたいという人は、実現したら今度は税金について文句を言うようになります。そのようにしては、我々は満たされることは無いのです。

もしもありのままの存在を自分で受け入れることが出来れば、より幸せになれるのではないのでしょうか？

受け入れることは人生を人生の条件そのままに受け入れる能力を身に付けていくことであります。時に「業」は我々に試練を与えます。突然の身内の不幸、株の暴落と資産の消失、離婚、などなど。我々はどうするべきなのでしょうか？

2015年9月、最愛の友フレッドとの突然の別れがありました。二歳の時に出会い、60年来の仲でした。動揺のあまり言葉を失い、傷つき、消失感に打ちひしがれていました。しかし暫くして、今私がこの事実に対して働きかけられることは何も無いことに気が付きました。ですから私はこの悲しく辛い出来事を少しずつ受け入れていきました。同時に私は、自分の抱いている悲しみと彼の家族の抱いているであろう悲しみを比べてみました。私の悲しみは家族のそれには到底及ぶはずもなく、残された彼の家族のためにも私はこの現実、少なくとも地球上で起こった物理的な出来事としての事実、を受け入れなければならぬと思えました。

矛盾しているようですが、現実を受け入れた途端、私には彼の命が永遠であることが理解できるようになりました。彼の命は彼が生前行った善行を通して生き続けています。数百人に与えた実質的な影響を通して、また彼が体現していた愛と思いやりの精神で数千にも下らない人々に与えた間接的な影響を通して、その影響の中に生きています。彼はもういません。しかし未だに生きています。彼のことを（毎日）思う度、胸が締め付けられるような悲しみを感ずますが、彼が形を変えて生き続けていることも感じます。

私が思うには、私たちは皆受け入れ難い出来事が起こってしまうことを知っています。しかし、現にそのような出来事が起こってしまったって初めて、その頭では分かっていることが真に試

佛心

二〇一六年三月号

浄土真宗

トロント本願寺

“Life is dukkha”

「人生は“Dukkha”である」

若しくは

「ごめんなさい。あなたにバラの花園を約束したことなど一度もありません。」

2016年2月 ジョン・スケルトン

新年を順調に滑り出し、2015年がバックミラーの彼方に消えようとしている今日この頃。多くの人にとって年の変わり目は幸せで楽しいものです。パーティーに参加し、買い物をし、贈り物をし、家族や大事な人と特別な食事を囲む。

しかし一部の人のとって12月は悲しく憂鬱になるものでもあります。家族が離れていて会えなかつたり、家族や近い人との別れがあつたり、年の瀬の無茶苦茶な忙しさにうんざりしたり、経済的な困窮から子供が家族と一緒にいられなかつたり、酷い時には飢えに苦しんだり。理由は何であれ、全ての人が陽気なサンタさんをウキウキと待つ気分です。

仏の教えの根源的な理の中に「人であることはつまり苦しむことである」というものがあることはご存知でしょう。釈尊によつて明らかにされた第一の真理は「人生は苦しみ(Dukkha)である」と我々は教わってきました。多くの人はそれを「人としての生は痛みと苦しみに不可分に結びついており、我々は輪廻の環から逃れられない」と解釈しています。これでは心中穏や

かではられません。

この悲観的な解釈が釈尊の伝えたかったことであるとは、私には到底思えません。

サンスクリット語の「dukkha」（パーリ語の「dukkha」）を「苦しみ」と翻訳することについて、多くの識者が不適切で問題であると異を唱えてきました。「苦しみ」では否定的な意味合いが強すぎる、と。実のところ、「dukkha」という言葉が我々の信仰の核心部分であるが故に、その解釈の否定的な意味合いも手伝つて、却つてこの教えに深入りせず距離を取ろうとしてきたのではないのでしょうか。

一部ではより適切な翻訳は「心地の悪いこと」若しくは「容易でないこと」だと提案されています。マニトバ本願寺のフレデリック・ウルリッヒ先生が以前こう仰つておりました。

「dukkhaは歪な車輪の荷車に乗っている時の心境に似ている。それはがたがたと揺れ、乗り心地の悪いものとなるでしょう。」

ですから寧ろ、言葉を単純に翻訳するよりも、石畳の道を牛車に乗り込んで進んでいる状況を想起し「人生とはがたと揺れる旅路のようなものである」という感覚を理解するべきなのでしょう。

ところで、第一の真理と聞くと私は1973年に発表された西洋カントリーソングの歌姫リン・アンダーソンの古い歌「バラの花園」を思い出します。その冒頭の歌詞はこのようになっていま

ごめんなさい

あなたにバラの花園を約束したことなど一度もありません

太陽の輝きに寄り添い

時々雨に出くわす